

『落葉集』の字音仮名遣い

鄭 炫 赫

【キーワード】 キリシタン資料 国字本 字書 仮名遣書

1. はじめに

『落葉集』は、1598年、キリシタン宣教師たちのために刊行された唯一の漢字辞書である。この字書は漢字の両側に音と訓を網羅的につけており、当時の字書としては特徴的である。そのため『落葉集』はキリシタンの字書の実態をあらわすものとして注目されてきたが、字音や字訓の仮名遣いになるとほとんど研究されていない(注1)。

本稿ではキリシタン版国字本の表記の方針を探る意味で、『落葉集』の字音仮名遣いに注目したい。その理由は、規範としての字音仮名遣いが定まっていないとされる時期(注2)に、編者によってほぼすべての漢字に振り仮名が施されているからである。ところで、その字音仮名遣い(注3)をみると、以下のような傾向が指摘できる。

①フ入声韻尾の表記、カ(ガ)行合拗音の表記はすべて統一されている。なお、母音韻尾やオ段・ウ段拗長音の末尾も表記のゆれが少なく、ほぼ統一されている。

②影母・于母・匣母の表記はゆれが激しい。

規範としての字音仮名遣いが定まっていない状態で、編者が一定の方針を決めて仮名表記をするならば全体にゆれがあまり現れないのが当然である。さらに、『落葉集』が規範性を背景にもつ字書であるという特徴を考えれば上記のような傾向は普通ではない。よって、本稿では、なぜ『落葉集』の字音仮名遣いがこのような傾向をみせるようになったかを探りたい。

『落葉集』の字音仮名遣いについては本格的な研究はないが、キリシタン日本語研究の特質を述べる中で、土井忠生(1971)は、『落葉集』の字音仮名遣いを「表音的仮名遣い」(47頁)であると主張している。本稿では、土井の研究を踏まえながら『落葉集』の字音仮名遣いを見て行くことにする。

本稿は、土井の主張をも踏まえて検討を行うので、母音韻尾「-ŋ」・入声韻尾「-p」の表記、カ行・ガ行合拗音の表記、オ段・ウ段拗長音の表記、影母・于母・匣母・喻母の表記のみを扱い、鼻音韻尾「-m」「-n」の表記、入声韻尾「-t」「-k」の表記は除いた。なお、本稿での調査範囲は『落葉集』の「本篇」

「色葉字集」「小玉篇」とし、「百官並唐名之大概」、「日本六十余州」は除いた。

このようにして抽出された『落葉集』の字音仮名遣いの例は、全 7535 例（注 4）である。この数字は、例えば「会」なら 1 字 2 例（カ行合拗音：「くハ」1 例、^ハi 韻尾：「い」1 例）として数えたものである。資料は土井（1971）と同じ慶長三年耶蘇会版『落葉集』を用いた。

2. 『落葉集』の字音仮名遣い概観

『落葉集』の字音仮名遣い全 7535 例を韻尾、カ行・ガ行合拗音、拗長音、声母別に分けて検討する。以下、実例は本篇、色葉字集、小玉篇の例を合わせて示す。ただし、別々に示す必要がある時は、本篇は「本」、色葉字集は「色」、小玉篇は「小」と略して示す。

2-1. 韻尾の表記

-i 韻尾の例は全部で 213 字 1460 例で、以下のように大部分「い」表記である（数字は例数、以下同様）。

あい（愛 15、哀 4、…）、えい（裔 1）、かい（海 28、界 22、…）、がい（害 9、涯 9、…）、く^ハはい（会 14、懷 13、…）、ぐ^ハはい（外 32、懷 1）、けい（計 12、恵 7、…）、げい（芸 10、鯨 4、稽 1）、さい（歳 14、才 13、…）、ざい（罪 20、財 14、…）、すい（水 62、酔 12、…）、ずい（瑞 5、髓 5、…）、せい（勢 21、世 11、…）、ぜい（税 1、西 1、…）、たい（体 37、台 18、…）、だい（大 31、代 25、…）、つい（堆 6、墜 3、…）、てい（底 22、帝 10、…）、でい（泥 12）、ない（内 27）、はい（拝 11、輩 11、…）、ばい（梅 13、媒 8、…）、ぱい（盃 3、拝 1、…）、ひい（鼎 2）、へい（閉 5、幣 2、…）、べい（米 3、吠 2）、まい（昧 5、米 4、…）、めい（迷 5）、ゆい（唯 4、惟 3、…）、らい（来 52、雷 10、…）、るい（類 25、涙 13、…）、れい（礼 16、例 10、…）、わい（賄 4）、ゑい（叡 4、衛 2）

「ひ」で表記された例は、以下の 3 字 3 例である。

「睡」6/「睡」1（本 55 頁 1 行「鶴睡」）、^イ「廻」7/^イ「廻」1（色 164 頁 7 行）、^イ「梅」1/^イ「梅」1（色 151 頁 7 行）

-u 韻尾の例は全 139 字 749 例で、以下のように大部分「う」で表記される。

あう（奥 1）、おう（謳 1）、かう（高 7、孝 6、…）、がう（号 13、告 3、…）、ぐう（遇 6、隅 2）、こう（厚 9、后 6、…）、ごう（肱 1）、さう（草 35、巢 6、…）、ざう（造 6、草 1）、すう（数 3、雛 3、…）、そう（奏 8、走 9、…）、たう（到 5、刀 16、…）、だう（道 62、導 5、…）、とう（頭 54、闘 3、…）、どう（頭 3、豆 2）、てう（頭 1）、なう（脳 4、惱 4）、はう（抱 2、鮑 2）、ばう（飽 4）、ぱう（貌 1、炮 1）、ふう（夫 2）、ほう（宝 13、報 6、…）、ぼ

う (謀 10, 帽 2, …), まう (撲 1), もう (耄 4, 毛 3, …), やう (恙 1),
ゆう (友 15, 遊 13, …), よう (要 24, 曜 8, …), らう (老 28, 勞 15,
…), ろう (櫓 20, 蟻 3, …), わう (奥 2), をう (謳 2)

「ふ」で表記された例は以下の 3 字 3 例である。

「遊」13/「遊」1 (色 159 頁 6 行), 「佑」1 (小 189 頁 2 行), 「樓」1 (本 6
頁 3 行「一樓」)

-ŋ 韻尾の例は全部で 273 字 1745 例で, 「う」あるいは「い」で表記される。「い」
で表記される例は漢音で梗撰に該当する例である。以下に -ŋ 韻尾の例を示す。

あう (鶯 1), いう (勇 1), おう (翁 15, 擁 1, …), かう (香 32, 向 10,
…), がう (郷 5, 仰 2, …), くう (宮 3, 空 16), ぐう (宮 8, 窮 2, …),
くはう (光 34, 黄 8, …), こう (功 14, 公 11, …), ごう (恒 2), さう (相
34, 想 10, …), ざう (藏 16, 像 9, …), そう (僧 29, 窓 27, …), ぞう
(僧 6, 増 3, …), たう (当 18, 党 13, …), だう (堂 22, 党 4, …), つ
う (通 21, 痛 6), づう (通 2), とう (灯 19, 冬 10, …), どう (動 15,
童 10, …), なう (囊 3), のう (能 13, 農 5, …), はう (方 19, 放 7, …),
ばう (亡 13, 坊 4, …), ぱう (方 11, 防 2, …), ふう (風 36), ぷう (風
21), ほう (鳳 7, 峯 6, …), ぼう (萌 3, 崩 3), ぼう (峯 4, 蜂 2, …),
まう (望 15, 盲 8, …), もう (毛 10, 蒙 3, …), やう (様 21, 陽 19, …),
ゆう (勇 8, 雄 3, 熊 1), よう (用 39, 庸 3, …), らう (浪 12, 狼 5, …),
ろう (籠 12, 弄 1, …), わう (王 19, 往 10, …), をう (応 13, 擁 2)
けい (慶 9, 景 15, …), せい (声 34, 星 16, …), てい (亭 8, 程 6, …),
ねい (寧 1, 寧 5, …), へい (並 2, 秤 1, …), めい (命 29, 明 22, …),
れい (冷 14, 靈 11, …), ゑい (映 7, 英 7, …)

「ひ」や「ふ」の表記は, 以下のように 1 例ずつ見られる。

「影」16/「影」1 (本 54 頁 2 行「火影」), 「僧」5/「僧」1 (本 23 頁 4 行「陳僧」)

-p 韻尾の例は全部で 44 字 357 例で, 「ふ」表記はなく, 以下のようにすべて
「う」で表記される。

えう (葉 31), かう (合 5, 甲 7, 鴨 2, 蛤 1), がう (合 14), きう (吸 3,
急 4, 及 3, 給 4, 汲 3, 泣 2, 扱 2), ぎう (級 3, 及 1, 吸 1), けう (狹 1,
缺 1, 脇 1, 業 1), げう (業 14), こう (劫 9), ごう (業 19, 劫 5), さう
(挿 2), ざう (雑 3), しう (集 5, 執 3, 拾 2), しゅう (執 1), じう (渋
3, 十 2, 汁 5, 習 3, 入 1), せう (接 1, 撰 1), たう (答 13, 塔 10, 踏 4),
だう (答 1, 納 1), でう (暈 5, 帖 2), なう (納 12), にう (入 11), はう
(法 12, 類 2), ばう (法 1), ぼう (法 4, 類 1), ほう (法 38), ぼう (法 8),
ぼう (法 19), よう (葉 2), らう (臈 7), りう (立 13, 粒 4), わう (押 3)

・p 韻尾の字の中には、「^{かう}合」5 例/「^{かつ}合」1 例のように「う」または促音「つ」による表記が見られる例も 13 字 116 例ある。

以上、韻尾の表記は「い」あるいは「う」の形でほぼ統一されている。しかし、その中で「ひ」や「ふ」表記の例が少数であるが存在する。その理由は、一概にはいえないが、『落葉集』の和語の仮名遣いと関係があるようである。「i」音・「u」音をあらわす『落葉集』の活用語尾の仮名遣いをみると、「i」音は 78.1% (200/256) が「ひ」表記であり、「u」音は 99.0% (1295/1308) が「ふ」表記である (注 5)。このような状況の中で『落葉集』の韻尾の表記に「ひ」や「ふ」が現れたと判断される。例が少なかったのは、『落葉集』が漢字を中心にして左右が字訓と字音の表記に分かれていて混乱する余地が少なかったからだと思われる。

2-2. カ行・ガ行合拗音の表記

カ行・ガ行合拗音は全部で 78 字 549 例が認められる。すべてが「くハ〜」「ぐハ〜」と表記される。以下にその例を示す。

くハ (花 49, 火 24, 過 17, 科 10, 菓 10, 果 10, 瓜 6, 課 4, 貨 4, 掛 3, 臥 2, 鍋 2, 戈 1, 苴 1, …), ぐハ (臥 8, 瓦 5, 画 3, 過 1), くはい (会 14, 懷 13, 廻 8, 灰 6, 快 4, 塊 4, 恠 4, …), ぐはい (外 32, 懷 1), くはう (光 35, 荒 6, 皇 5, 黄 4, 遑 2, …), くはく (鶴 8, 郭 7), くはつ (活 9, 滑 5), ぐはつ (月 9), ぐはち (月 2), くはん (官 19, 觀 18, 冠 11, 管 9, 関 8, 巻 7, 斲 7, 貫 6, 環 6, 棺 5, 歛 5, 還 4, 緩 4, 換 3, 喚 3, 寬 3, 串 3, 勸 3, 鎌 2, 館 2, 筍 2, 鐘 2, 頑 1), ぐはん (願 21, 頑 5, 丸 4, 卷 3, 元 2, 歛 1, 觀 1, 冠 1)

これらの例を沼本克明作成の「主要字音仮名遣い一覧」(注 6) (以下、「主要字音仮名遣い」とする) に照らしあわせてみると、全例がカ行・ガ行合拗音に属する漢字でゆれがない。これとは逆に本来のカ行・ガ行合拗音を直音表記した例もほとんどない。唯一「宏」だけが本来「クワウ」であるが直音「コウ」と表記されている。実例は「^{こうがい}宏才」(本 72 頁 4 行), 「^{こう}宏」(色 168 頁 5 行), 「^{こう}宏」(小 209 頁 5 行) である。「^{こうがい}宏才」を『五本対照改編節用集』(亀井孝, 高羽五郎編) でしらべると、黒本本に「^{こうざい}口才」(下 或作宏) の形が、天正本に「^{こうざい}口才」(下 又作宏) の形が見られる。これは『落葉集』だけが「宏」を「こう」にしたのではなく、当時の節用集でも「口」と通用するものとして「宏」の字を用いていたことを意味する。

特に『落葉集』のカ行・ガ行合拗音をすべて「くハ」「ぐハ」と表記していることは注目される。

「ハ」の表記は、『落葉集』の和語の語中尾に使われたとき、ほとんどワ音をあらわしている。唯一ハ音をあらわす可能性のある例が、『落葉集』の本篇の

「^{きたへし}階」(16頁1行)である。なお、『落葉集』「本篇」の正誤表で「旗」の「ハ」を「はた」、 「橘」の「ハ」を「はし」に直しているものも見られる。

このような面から考えると、「ハ」字は本来ハ音をあらわすが、『落葉集』ではワ音をあらわそうとする方針があったようである。高羽五郎(1951)は、同一の傾向が「ぎやどべかどる字集」にも見られると言い、当時一般に「ハ」がワ音をあらわす特殊用法があったことを述べている(2頁)。なぜ『落葉集』の編者が、カ行・ガ行合拗音の表記をすべて「くハ」「ぐハ」としたかはさらに検討を要するが、本稿は当時一般の仮名用法の習慣を、『落葉集』の編者が積極的に取り入れようとした結果であると考ええる。

2-3. 拗長音の表記

『落葉集』のオ段拗長音をみると、土井(1971)の指摘のように、イ段の仮名+ヤウやエ段の仮名+ウで表記される。この表記方法は、迫野虔徳(1968)によると「鎌倉期以降も同様であった」(56頁)と言う。特にエ段の仮名+ウの表記は、森田武(1955)によると中世の節用集類、易林本・饅頭屋本・伊京集などにも「全般的に」見られる傾向だと言う。『落葉集』の中でイ段の仮名+ヤウの形は115字957例で、エ段の仮名+ウの形は95字440例である。以下にその例を示す。

・イ段の仮名+ヤウの例

きやう(香7, 驚5, …), ぎやう(行82, 形6, …), しやう(障16, 章15, …), じやう(城32, 情23, …), ちやう(帳12, 頂6, …), ぢやう(定21, 杖9, …), ひやう(兵7, 評3, …), びやう(病32, 餅1, …), みやう(名22, 明17, …), りやう(量19, 梁10, …)

・エ段の仮名+ウの例

けう(興8, 暁5, …), げう(堯3, 凝2, …), せう(勝11, 証4, …), ぜう(縄7, 乗2, …), てう(朝15, 潮7, …), でう(条2, 逃2, …), ねう(邊2), へう(氷7, 表5, …), ぺう(廟6, 苗4, …), ぷう(氷2, 表1, …), めう(妙10, 苗6, …), れう(龍13, 料8, …)

『落葉集』のエ段の仮名+ウには、歴史的仮名遣いならばイ段の仮名+ヨウで表記されるはずのものまで含めている。以下にその例を示す。

けう(興8, 恐2, 凶5, 恭3, 拱2, 胸4), げう(凝2), せう(勝11, 鐘3, 従1, 承6, 称3, 衝3, 訟3, 證3, 縄5, 昇3, 松3), ぜう(茸1, 承1, 縄7, 剩2, 乗2), てう(寵6, 懲4), でう(濃2), へう(氷7), れう(龍13, 綾2, 凌3)

しかし、『落葉集』のヤ行の拗長音は、開音は「やう」、合音は「よう」で表記されている。これは他の拗長音において開音がイ段の仮名+ヤウ、合音がエ段の

仮名+ウであることとは一致しない。ただし、「葉」は「よう」(2例)以外にも「えう」(31例)の表記も見られる(注7)。以下にヤ行の拗長音の例を示す。

やう(恙1, 抛1, 永1, 桜1, 様21, 瑤2, 養2, 揚7, 楊2, 羊8, 陽19)
えう(葉31), よう(葉2, 幼5, 腰4, 鷹2, 遥1, 曜8, 魍2, 妖3, 揺3, 要24, 夭3, 雍1, 容1, 勇1, 庸3, 用39)

オ段拗長音の表記には、開合の混同が見られる例も存在する。これは近世初期頃に見られる重要な現象で慎重な検討を要するが、稿をあらためて述べることにし、実例だけを示す。

開音を合音に表記した例: 梗^{けう}3, 更^{けう}1, 証^{せう}4, 逃^{てう}2

開音と合音の間でゆれがみられる例: 挑(ちやう:本1, てう:本1・色1・小1), 屏(びやう:本3・色1・小1, べう:本1)

オ段拗長音の表記と関連して迫野虔徳(1968)は、鎌倉時代以降の「仮名文のオ段拗長音の仮名表記は、イ段の仮名+ヤウとエ段の仮名+ウの二つで、それぞれ開音と合音を分担する」(62頁)と述べている。これに基づいて『落葉集』のオ段拗長音の表記を考えると、『落葉集』は当時の仮名文のオ段拗長音の表記とほぼ同じ表記であったことが分かる。

『落葉集』のウ段の拗長音表記がなされたものは81字476例あり、全例がイ段の仮名+ウで表記される。これは土井(1971)で言われるとおりである。実例を以下に示す。

きう(丘3, 宮17, …), ぎう(牛21, 休1), しう(秋19, 宗11, …),
じう(従6, 柔1, 獣9, …), ちう(頭1, 宙1, 虫14, …) ぢう(住13,
中9, …), にう(柔5, 乳5), びう(謬1), りう(留3, 龍5, …)

これらの例の中には、オ段拗長音をウ段拗長音にした「共(きう:小1)」、「恫(ちう:本1)」の例が見られる。さらに、以下のようにオ段拗長音とウ段拗長音との間でゆれが見られる例も存在する。これらのゆれについて、迫野虔徳(1975)は、中世末、近世初期頃に見られる現象だと指摘している。

朽(きう:小1, けう:色1), 焦(しう:小1, せう:本2・色1・小1),
彫(ちう:色1・小1, てう:色1), 謬(びう:小1, べう:色1)

2-4. ア・ヤ・ワ行音にはじまる字音表記

影母・于母・匣母・喻母の漢字音を表記した例は以下のとおりで、韻尾の表記に比べてゆれが多く見られる。以下に、影母・于母・匣母・喻母の実例を「ゆれの無い例」「ゆれのある例」「1例のみの例」に分けて全例を示す。

(1) 影母: 63字402例

- ・ゆれの無い例: い(委4, 威8, 意38, 医10, 恚3, 慰4), いき(域3),
いち(一4), いつ(一4), いん(因11, 淫6, 愍3, 茵4, 飲2, 隱6,

院 12, 陰 18, 音 15), お (淤 2), おう (翁 16), あい (映 7, 英 7, 影 20), ゑん (宛 2, 獸 3, 宴 3, 燕 4, 淵 5, 院 2), をく (億 2, 屋 4), をん (瘡 3, 穩 4, 音 13)

- ・ゆれのある例: 印^{いん}6/印^{おん}1, 飲^{おん}3/飲^{おん}3, 隠^{おん}1/隠^{おん}1, 穢^え1/穢^え7, 營^{えい}3/營^{えい}3, 益^{えき}4/益^{えき}1, 煙^{えん}7/煙^{えん}13, 屋^{おく}3/屋^{おく}10, 臆^{おく}3/臆^{おく}5, 怨^{えん}1/怨^{えん}7, 応^{おう}13/応^{おう}2, 謳^{おう}2/謳^{おう}2, 擁^{おう}2/擁^{おう}1, 乙^{おつ}2/乙^{おつ}1, 恩^{おん}21/恩^{おん}1, 溫^{おん}1/溫^{おん}1

- ・1例のみの例: い (尉 1, 畏 1, 縊 1, 辰 1), いち (荅 1), いん (尹 1), おく (奥 1), おん (陰 1), ゑ (烏 1), を (惡 1), ゑつ (穢 1), をつ (臆 1), をん (怨 1)

(2) 于母: 30字 157例

- ・ゆれのない例: い (遺 2, 易 5, 異 8, 以 2), いく (育 3), えう (葉 32), ゑ (衛 7), ゑい (叡 4, 永 4, 泳 3, 盈 3, 衛 3), ゑん (演 3, 艶 5, 塩 4, 鉛 3)
- ・ゆれのある例: 商^{かい}2/商^{かい}1, 奕^{えき}1/奕^{えき}2, 易^{えき}3/易^{えき}3, 悅^{えつ}1/悅^{えつ}9, 焰^{えん}4/焰^{えん}1, 緣^{えん}4/緣^{えん}23, 延^{えん}3/延^{えん}1
- ・1例のみの例: いう (勇 1, 遊 1), いん (寅 1), ゑき (疫 1, 駅 1), ゑん (寅 1, 簪 1)

(3) 匣母: 33字 197例

- ・ゆれのない例: い (衣 2, 謂 3, 圉 4, 違 6, 帷 3), え (衣 46), ゑ (絵 7, 恵 4, 会 8, 壞 3, 廻 3, 慧 2), ゑい (詠 6), ゑつ (越 2), ゑん (炎 4, 垣 2, 猿 3), をつ (越 3)
- ・ゆれのある例: 位^い1/位^ゐ21, 為^い2/為^ゐ5, 榮^{えい}7/榮^{えい}1, 圓^{えん}5/圓^{えん}4, 依^え4/依^え1, 遠^{えん}4/遠^{えん}12, 園^{えん}12/園^{えん}3
- ・1例のみの例: い (口 1, 依 1), いふ (佑 1), いん (員 1, 韻 1), おう (雄 1), ゑ (榮 1), ゑち (越 1), ゑつ (鉞 1), ゑん (爰 1), をん (遠 2)

(4) 喻母: 6字 29例

- ・ゆれのない例: い (伊 3, 移 3), いつ (溢 4, 逸 6), いん (引 10)
- ・1例のみの例: い (疏 1), いち (逸 1), えん (引 1)

すなわち、喻母については、ゆれは存在しない。そこで、影母・于母・匣母に見られるゆれの例に限って声母と関係なく分類すると、「い」「ゐ」のゆれが3字、「え」「ゑ」のゆれが17字、「お」「を」のゆれが10字存在する。

以上、『落葉集』の字音仮名遣いを整理すると、-p 韻尾と拗長音の場合は、表記が統一されており、最後の部分がすべて「う」表記である。なお、力行・ガ行合拗音の表記もすべて「くハ〜」「ぐハ〜」の表記で統一されている。さらに、-i

韻尾は「い」表記、-u 韻尾は「う」表記、-ŋ 韻尾は「う」「い」表記で、若干「ひ」「ふ」の表記が見られる。

しかし、影母・于母・匣母の表記は、「い」「ゑ」「を」の表記とともに「ゐ」「え」「お」の表記もかなり見られる。つまり『落葉集』の字音仮名遣いは、かなりの部分は統一されており、一部はそうではない。

『落葉集』が辞書という規範性をもっている文献であることを考えると、このような字音仮名遣いがあらわれることにはなんらかの理由があったと思われる。

3. 『落葉集』の部立ての影響

まず『落葉集』の影母・于母・匣母の表記にゆれが激しかった理由を部立てから考える。

『落葉集』の部立ては、「い」「ゐ」は「い」、「え」「ゑ」は「ゑ」、「お」「を」は「を」に統一されている。この「い」「ゑ」「を」を土井 (1971) は「i ye wo の発音を写す仮名と定めた」(47 頁) と指摘している。

『落葉集』の影母・于母・匣母・喻母の例がどれほど部立ての影響を受けていたかを見るために、まず「ゆれの無い例」と「1 例のみの例」を、歴史的仮名遣いと比較する。その結果は以下のとおりである。

歴史的仮名遣いは「ゐ」であるが『落葉集』は「い」の例

：委 4, 威 8, 慰 4, 遣 2, 謂 3, 困 4, 違 6, 帷 3, 畏 1, 尹 1,
域 3, 院 12, 員 1, 韻 1

歴史的仮名遣いは「え」であるが『落葉集』は「ゑ」の例

：叡 4, 永 4, 泳 3, 盈 3, 詠 6, 獸 3, 宴 3, 燕 4, 淵 5, 演 3,
艶 5, 塩 4, 鉛 3, 簪 1, 炎 4

歴史的仮名遣いは「お」であるが『落葉集』は「を」の例

：億 2, 音 13

これらの例は、影母・于母・匣母の表記の中で「ゆれの無い例」と「1 例のみの例」の漢字 95 字中 31 字で 32.6% を占めている。

しかし、影母・于母・匣母の表記の中で「ゆれのある例」の中では、部立ての影響をうけたと判断される字は「位」「榮」のみである。

「位」は全 22 例であるが、その中で「い」の表記が本篇の「い」部に小見出として 1 例 (5 頁 8 行) 見られるだけで、他の 21 例は他の部に属して「ゐ」で表記される。「榮」は全部で 8 例あるが、「ゑ」部の小見出に「ゑい」1 例 (110 頁 4 行) があるだけで、残りの 7 例は「ゑ」部とは関係ないところに「ゑい」であられる。逆に「本篇」で部立ての影響をうける位置にあるにも関わらず影響をうけていない「依」(ゑ部, 120 頁 2 行), 「依」(ゑ部, 120 頁 3 行), 「陰」(を部, 29 頁 5 行) も見られる。

4. 仮名遣書との関連

ここでは影母・于母・匣母の表記のゆれが激しかったことについて『落葉集』の編者と当時の仮名遣書との関連を検討する。

『落葉集』の編者が、当時の仮名遣書を参考にした可能性を示唆する記述がロドリゲス著『日本小文典』(1620年刊)に見られる。それは以下のとおりである。

したがって、彼らが言葉を組みたててゆくときにみられる調和性は、もっぱら「五音」と「仮名遣」とに存するのである。このことに習熟した者ではない限り、たとえ本国人でさえ、ある法のある時がどこからつくられるのか、そのことは、すぐに判然としないし、言葉の構成にあたって、いかなる文字なり音節なりを他の文字なり音節なりに変換すべきなのかも、わかりはしない。これについては一冊の小冊子があり、ここに「仮名遣」と、この問題に関するもろもろの一般的規則が説かれている。教師たるもの、必ずこの小冊子をもち、かつこれを「仮名」文字の学習に励む生徒に教授しなければならぬ。これは容易であるばかりか有益なことでもある。(日笠博司編訳『日本小文典』74頁)

この記述でロドリゲスは、「仮名遣い」やそれに関連する「もろもろの一般的規則」を習得するために「小冊子」を利用することを勧めている。この「小冊子」が具体的にどういうものか明らかにされていないが、福島邦道(1973)は「仮名遣近道など」(289頁)をあげている。

以下では「仮名遣近道」(注8)を含め、当時の仮名遣書を三種選んで、当時の字音仮名遣いがどのようになっているかを検討する。

福島があげている一条禅閑作の『仮名遣近道』(1402年～1481年の間に成立)において字音仮名遣いをみると、「い」と「う」の項目に分けて記述されている。

「い」の場合は、「一 端のいの事」の項目に「音によむ字は皆端のいなり」(6丁裏)という記述があり、その次に字音語の例が9例見られる。次に「う」の場合は、「一 うの字の事」の項目に「意(橋本進吉蔵写本は「声」)にうと書時は皆うなり」(9丁裏)という記述があり、その次に字音語の例(たとえば、「そう僧」や「せうしやう少将」)があわせて14例あがっている。

次に、逍遙院(三条西実隆)作の『仮名遣つゝらおり』(文明九年(1477)から永正十三年(1516)の間成立)をみると、「はしのいをしたに書事声によむ字は皆はしのい也」と「うの字を下にかく事声によむ時下をうとよむ也」の項目を設け、実例をあげて説明している。

三つ目に『落葉集』作成時と近い吉田広典作の『新撰仮名文字遣』(永禄九年(1566)頃成立)をみると、「下」に書く「い」については、「一 いもしをもちゆるかな乃事」の項目に112の字音語(たとえば、「はくはい 白梅」), 77の和語(た

たとえば、「まいる 参」), 7 の混種語 (たとえば、「すみいつい 墨一挺」) をあげ、その次に以下のように記述している。／印は行変えを意味する。

惣而こゑによむ時は皆以いのかな也此ことはりにて／すみ候はんすれ共
これは小童に文字をしらしめん／かために如此数多書付候也 (影印本 29 頁)

「下」に書く「う」の場合は、「一 うもしをかくかなの事」の項目に 6 の字音語 (たとえば、「なうしう 納受」) をあげ、次に以下のように記述している。

如斯うもしをかくかなは無尽期まゝ畧之ふもし／とうもしとひゝき相通したるによりて／紛るゝ事おほしれうけん有へきもの也／およそよみふこゑうと心得候文字をこゑに／いふ時はみなう文字也よみの時は皆ふ也 (影印本 95 頁～96 頁)

以上、三種の文献を通してみると、完全ではないが字音(「声」)の意識が高まって、このような場合「下」に「い」「う」を用いるという規範意識が存していたことが分かる。このような一種の規範がどこまで浸透していたかは確認できないが、『落葉集』とほぼ同時期の『新撰仮名文字遣』にも「下」の字音は「い」、「う」で書くという記述があることから考えて、この規範意識は『落葉集』作成時にも存在していたと思われる。

特にこの点について、上記の三種の文献は、実例と共に「ことはり」書きを見せていることが注目される。たとえば、『新撰仮名文字遣』の「下」に書く字音「い」の記述をみると、「こゑによむ時は 皆以いのかな也 此ことはりにてすみ候はんすれ共…」とあって、「下」に書く字音「い」は「ことはり」だけでも十分であったことが確認される。

しかし、字音の頭字が「い」「ゐ」「え」「ゑ」「お」「を」の場合については、『仮名遣近道』『仮名遣つゝらおり』『新撰仮名文字遣』の三種の文献には、字音をどのように書くかの「ことはり」書きのような記述はほとんど見られなく、実例が和語と共に示されるのみである。唯一記述が見られる『仮名遣近道』の場合を見ても、「一 奥のゑの事」の項目で「こゑ声 すゑ末 ゆくゑ向後 ゑしま絵嶋このゑ近衛 ゑもん右衛門 ひやうゑ兵衛 ゑし衛士」の例があって、その次に「此外本字衛の字は皆奥のゑなり」の記述がある。記述の説明は「衛」の字を「ゑ」に書くということで、「上」に書くすべての字音を「ゑ」に書くという意味ではない。『仮名遣つゝらおり』や『新撰仮名文字遣』は、字音についての記述はなく、ただ和語とともに字音語の例が示されている。

以上、三種の仮名遣書において、「下」に「い」「う」を用いるということが「ことはり」書きのような形で記述されていたが、字音の頭字が「い」「ゐ」「え」「ゑ」「お」「を」の場合は、すべてをどう書くという記述はなく大部分和語と共に実例で示されていた。

仮名遣書がこのような状態であった以上、『落葉集』の編者が仮名遣書を参考にするなら、字音末尾がイ、ウの音の例は簡単に「い」「う」で表せるが、字音の

頭字については、仮名遣書の「ことばり」書きのような記述の手助けが得られず、各語ごとにどう書くかを考えなければならない状態に置かれていたと考えられる。

『落葉集』の成立と関連して、安田章(1991)は、『落葉集』の「色葉字集」の例を取り出して「色葉字集」が「それ(日本語)に通じている本国人」(22頁)によって実際に表記され、外国人は方針を立てるにとどまったと言う。本稿は『落葉集』の編者が外国人なのか、日本人なのかは深くは検討しないが、少なくとも『落葉集』の編者が当時の仮名遣書などを参考にして当時の字音仮名遣いの方針を習得し、それに基づいて『落葉集』の韻尾の字音仮名遣いを行ったと推測する。

5. おわりに

以上、なぜ『落葉集』の字音仮名遣いが韻尾、カ行・ガ行合拗音、影母・于母・匣母によってゆれの状況が異なったかを述べてきた。

それをまとめると、韻尾やカ行・ガ行合拗音の表記にはほとんどゆれがないが、影母・于母・匣母の表記にはゆれが激しかったのは、『落葉集』編者が当時の仮名遣書のような文献を参考にして字音仮名遣いを行ったからであろうと考えられる。なお、カ行・ガ行合拗音の表記にゆれが見られなかったのは、「ハ」はワ音をあらわすという当時の仮名使用法の習慣を、『落葉集』編者が積極的に取り入れたからであった。

このような解釈に基づいて『落葉集』の字音仮名遣いを考えると、『落葉集』の字音仮名遣いは、表音的というより当時日本で一般的に行っていた字音の表記とそれほど変わらないものであったということになる。

【注】

- 1) 山田俊雄(1971)は、『落葉集』の字訓仮名遣いの不統一の状況を指摘するが、字音仮名遣いについては言及がない。
- 2) 佐藤喜代治は、『国語学大辞典』の「字音仮名遣」の項目で「規範としての字音仮名遣は初め国語一般の仮名遣に含めて取り扱われ…(中略)…江戸時代には長音における開合の別が失われ、四つ仮名の別も乱れたので、特に漢字音についてその仮名遣いを定める必要があった」(457頁)と述べている。これは『落葉集』作成時には、規範としての字音仮名遣いはなかったことを意味する。本稿もこの論に従って論をすすめる。
- 3) 本稿では、字音を仮名表記したものに、事実として認められる仮名の用いられ方(あるいはその傾向、規則)をさして「字音仮名遣い」とよぶ。とくに「規範」をさす場合は、その旨をこたわることとする。
- 4) 本稿の中で「至」(本 96:8)、「治」(本 22:3)、「是」(本 97:1)、「詩」(本 97:1)、「食」(本 8:5, 本 102:2)、「旨」(本 97:1)、「役」(本 112:2)のような慣用的な読み、「耽」

(色 167:2), 「辻」(小 216:3), 「働」(小 189:1) のような和製漢字, 「乙」(小 220:2), 「石炭」(小 197:8) 「三」(小 214:2) のように読みが確定しにくい漢字, 「宣」(本 66:8), 「聖」(本 17:5) のような間違っただけの読み, 字が不明の場合 2 例 (色 161:5, 小 211:4) は除いた。

- 5) 鄭炫赫 (2003) 「落葉集の和語の仮名遣い」(第 85 回漢字漢語研究会発表資料) による。
- 6) 中田祝夫編 (1983) 『古語大辞典』小学館の付録「主要字音仮名遣い」(沼本克明作成) による。
- 7) 土井 (1971) は、オ段の直長音の合音の例に「葉」をあけて表記を「オ段の仮名に「う」を加える」(47 頁) と言っているが、「よう」と「えう」にゆれていると見るべきである。
- 8) 福井久蔵編 (1981) 『国語学大系 第六巻』国書刊行会による。

【参考文献】

- 亀井孝案閣, 高羽五郎校刻 (1974) 『五本対照改編節用集 (上) (下)』勉誠社
国語学会 (1982) 『国語学大辞典』の「字音仮名遣い」項目 東京堂出版
迫野虔徳 (1968) 「仮名文における拗音仮名表記の成立」『語文研究』第 26 号
迫野虔徳 (1975) 「オ・ウ段拗長音表記の動揺」『国語国文』50-3 (迫野虔徳著 (1998) 『文献方言史研究』清文堂 所収)
ジョアン・ロドリゲス著 日埜博司編訳 (1993) 『日本小文典』新人物往来社
高羽五郎 (1951) 「ぎやどべかどる字集仮名字体」国語学資料第 6 輯『ぎやどべかどる字集索引』
土井忠生 (1971) 『吉利支丹語学の研究 新版』三省堂
福島邦道 (1973) 『キリシタン資料と国語研究』笠間書院
森田武 (1955) 「吉利支丹資料のローマ字綴—日葡辞書・ロドリゲス大文典を中心として—」『国語学』20 集
安田章 (1991) 「規範性への接近」『国語国文』61-1 (『国語史の中世』三省堂 1996 所収)

【資料】

- 大友信一・木村晟編集 (1981) 駒沢大学国語研究資料第三『新撰仮名文字遣』汲古書院
京都大学文学部編 (1962) 慶長三年耶蘇会板『落葉集』京都大学国文学会
武市眞弘編 (1989) 『静嘉堂文庫蔵 後普光園院御抄 仮名遣つゝらおり』和泉書院

付記：本稿は 2005 年 1 月 22 日、第 89 回漢字漢語研究会で口頭発表した内容に加筆修正を施したものである。ご指導くださった先生方に心より感謝申し上げます。